

新「共通特論Ⅱ」：臨床腫瘍学各論
個別化医療に向けた肝・胆・膵の悪性腫瘍に対する治療

講義日：2022年11月5日（土）

講師：小島 康志（国立研究開発法人国立国際医療研究センター病院
消化器内科 第四消化器内科医長）

要旨

予後の悪いことで知られてきた肝胆膵領域の悪性腫瘍ですが、少しずつ新たな薬剤が加わり、予後が延長していきます。

胆道がんでは、標準療法の1つであるゲムシタビンとシスプラチンに、免疫チェックポイント阻害薬デュバルマブを加えた治療法の有効性が検証され、新たな標準療法となる見込みです。

肝細胞がんでは、免疫チェックポイント阻害薬のアテゾリズマブと血管新生阻害薬のベバシズマブの併用療法に加え、免疫チェックポイント阻害薬の組み合わせであるゲムシタビンとデュバルマブの併用療法およびデュバルマブの有効性が検証されました。

BRCA 遺伝子変異陽性の治療切除不能な膵がんにおけるプラチナ系抗がん剤を含む化学療法を維持療法として、PARP 阻害薬のオラパリブや、2021年胆道がんの2次治療で承認を受けたFGFR2 融合遺伝子陽性の人に対するペミガチニブは、バイオマーカーや遺伝子パネル検査から個別化医療が期待される領域です。一方で、日常臨床で重要になるのは、一人一人の患者さんとどう向き合って、どういった治療選択をするか、だと思います。現在、治療可能な選択肢から、患者さん一人一人の治療選択の参考になる一助になればと思います。